フレーベル生誕二百年記念祭に参加して

松川由紀子

拝啓

先日、フレーベル生誕二百年記念祭参加ツアーから無事に帰国いたしました。

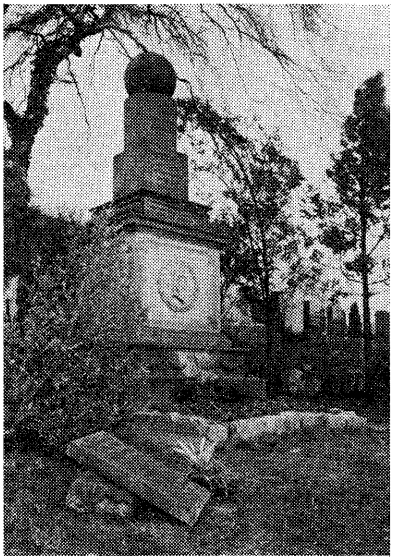
東独のオーベルワイスバッハ、イエナ、グリースハイム、カイルハウ、バート・ブランケンブルク、バート・リーベンシュタイン、マリエンタール、シュワイナなど、フレーベルの活躍した地をほとんど訪ねることができました。また、アイゼナッハ、ドレスデン、フランクフルト（西独）、ハンブルク（西独）にも立ち寄ることができました。これらもフレーベルの歩いた地です。とても感動いたしました。

イエナのフリードリッヒ・シラー大学での記念式典、シンポジウムでは、フレーベル研究の現状をおおまかにつかむことができましたし、若干の資料も入手できましたので、これから少しずつまとめていきたいと思っております。修論でフレーベルに取り組みましたが、むつかしく、その後も思うように研究がはかどっていませんでしたので、今年はがんばって取り組んでみようと気持も

新たにしております。しかし、わが国のフレーベル研究はまだまだ遅れているという印象を受けましたので、正直なところ、これは本当に大変だろうと思います。

記念祭は、四月十九日午後、シラー大学講堂にて、同大学オーケストラによるヴィヴァルディのシンフォニア・ハ長調第一楽章の演奏が高らかに響きわたるとともに開幕し、同大学総長ボロック博士のあいさつ「イエナ大学の十八、十九世紀頃の伝統」、記念祭実行委員長ギュンター教授の講演「フレーベルの業績と現代への影響」が力強くなされ、その合間にシューマンの「子どもの情景」などが演奏されて、会場の雰囲気が一層盛りあがりました。その後、歓迎の夕食会、レセプション。

二〇日。シンポジウム。午前中は全体会で、実行委員会による基調報告。午後は分科会（A、B）で、各国代表による研究発表。Aグループでは、荘司雅子先生が研究発表をなさいました。ランゲ編『フレーベル全集』を訳された方であると、司会者のギュンター教授が尊敬のまなざしで紹介したため、会場は大変な拍手で、とても熱心な雰囲気でした。先生のドイツ語はききとりにくいものだったのですが、全員が真剣にきいておりました。ところが、「子どもは神の賜物であるから」と発言なさったとたんに、会場はざわめき、私語は乱れ、聴衆の態度もゴソゴソし始め、立ち去る者も多く……、一時はどうなることかと思い、こちらも不安になりました。神をもち出すと科学、学問ではなくなるためか、通用しない様子でした。しかし、こうした反応は、日本では考えられないのではないかと思います。国際会議の恐ろしさを



（撮影　鳥海栄）

感じるとともに、フレーベル研究のむつかしさをあらためて思い知らされ、考えさせられました。なお、Bグループでは、副島ハマ先生が研究発表をされました。そして、夕食後は、昼間の疲れをいやすように、詩と音楽の夕べ、それにワイン休憩。

二十一日、フレーベル生誕の日。生家のあるオーベルワイスバッハを視察。生家前には町中の人々が集まり、高らかなブラスバンドが私たちを迎えてくれました。生家前では祝賀式が挙行され、フレーベルのブロンズの胸像が除幕されました。そして、各国（十二カ国）からの招待者百三十名余がいくつかのグループに分れて、順次視察。生誕地のフレーベル博物館として改築された生家、伝統のあるフレーベルタワー（幼少のフレーベルがひとり自然の中でさみしさをこらえた山頂に、一八九〇年に建設されたもので、フレーベルを愛する地元の人々の歴史が刻み付けられている旨、詳しく説明を受けました）、そして、フレーベルの父親が働いていた教会の裏手の丘に新設されたフレーベル幼稚園を視察。

二十二日。フレーベルが（幼稚園創立前に）教育実践をしていたグリースハイム、カイルハウ（ともに大変な寒村）を視察。この視察は東独側のご好意で急きょ実現したもので、あたりの自然環境はあたかもフレーベル教育学の真髄を示唆しているように思いました。その後、バート・ブランケンブルクに。市庁舎前の小さな広場では歓迎のブラスバンド。世界最初の幼稚園の建物が装いも新たにされて、この日開館された国立フレーベル博物館を視察。そして、ウィルヘルミネ夫人の墓を参り、第四幼稚園を視察。子どもたちが楽しそうに円陣遊戯をしておりました。その後、記念碑のある公園を散歩し、第二幼稚園の園庭を見学。なだらかな丘陵をそのまま生かしている園庭で、全く自然に近い感じでした。夕方、ルードルシュタットの丘にそびえるハイデックスベルク城のロココホールにてお別れのコンサート。あまりの豪華さ、豊かさにしばし時を忘れたものでした。以上が記念祭のおおまかな様子です。

なお、記念祭に先立つ四月十七日夕方、フレーベルが

はじめて教師になったフランクフルト、翌十八日、フレーベルが感動をもってよく訪ねたアイゼナッハのワルトブルク城、そして、フレーベル終生の地方、バート・リーベンシュタイン、マリエンタール、シュワイナなどを見学、墓参。記念祭の後は、フレーベルが幼稚園普及運動のため旅行したドレスデン、ハンブルクへ。（チェコスロバキヤのプラハにも立ち寄りました。）

という内容の二週間の旅でした。とても充実していた旅行であったと思います。

フレーベルの活躍した地は、そのほとんどがチューリンゲンの森の中、自然の美しい地方でした。そして、多くの幼稚園はその美しい、なだらかな丘陵をそのままとりいれて園庭にしていたように思います。チューリンゲンの森、丘の美しさは言葉ではとても表現できません。ゆるやかな丘陵、高い空は人の心をやさしくつつみ、特に夕陽は神々しくさえ思えました。こうした美しい自然の中で、彼の思想は育まれ、主著『人間の教育』に結実し、また、子どもたちの遊戯祭が行なわれ、幼稚園が少しずつ人々に理解されるようになったことを、静かにひとり考えておりました。チューリンゲンを旅してはじめて、フレーベルと対話できるような感じさえいたしました。

幼稚な英語、独語で各地の人々と身近に接し、国際親善も充分にしてまいりました。プラハでは、国営ラジオ放送局の英語のインタビューにも応じました。今考えると、よくひとりでやれたものだと自分でも驚きます。旅は人間を積極的な性格に変えるのでしょうか。しかし、同時に、もっと語学を学んでおかないといけないことも痛感いたしました。同行の方々（十六名）とも親しくなり、その点でもとても幸運な旅でした。

以上、とりとめもなく記しましたが、このあたりで失礼申し上げます。

乱筆、乱文をお許し下さいませ。

敬具

五月七日　　松川由紀子

津守　真先生